教育のひろば

教育ジャーナリスト
池田知隆

公教育のよさを見つめ直そう

地域で共につくりあげる教育を

志水宏吉・大阪大学教授に聞く

格差社会が広がっているなかで、公教育はいま、逆風にさらされている。特に都市部では、大学進学競争に向けて中高一貫校などへの私立志向が著しい。しかし、厳しい生活環境に置かれた子どもたちのために公立学校で全力投球している教師たちがいるのも確かだ。これからの公教育をどう築きあげていけばいいのか。子どもたちを元気づける学びの場はどのようにつくりあげていくのか。公教育のサポーターと自任している大阪大学教授（教育社会学）の志水宏吉さんに聞いた。

大人をみて育つ――

――公立学校のサポーターとしての仕事をしたい、といっておられますね。

（著書「公立学校の底力」）

◆今日、公立学校の旗色はあまりよくありません。特に大都市部では、「公立＝質のよくない教育」といった色眼鏡で見られ、苦々しい思いになることがしばしばです。しかし、地域のさまざまな子どもたちが集まり、互いに学び合っていく公立学校ならではのよさもあります。各学校の姿勢を単に批判したり、教師を断罪したりするスタンスではなく、教育現場の〈希望〉を見つけ出していきたいのです。

〈この「公立学校の底力」では、逆風のなかにあって、元気にあふれた12の学校の取り組みをあたたかい目でリポートしている。さらに、子どもたちを元気づけていくために何が必要なのか、積極的な提言も盛り込んでいる〉

――特に「教育は買ったり、選んだりするものではなく、一緒につくっていくものだと思う。できあいのものを消費するものが教育なのではない」という言葉には共感しました。

◆たまたまの縁で出会った者同士が、同じ場所で長い時間を過ごしていくなかで、何かをつくりあげていく。それが教育というものなのです。公立学校は、それがなされるのにふさわしい場です。次代をになう子どもたちに身につけさせることは何なのか。私たち大人は、何を信じて、子どもたちとどのようにかかわっていけばよいのか。公教育をめぐっていま、そのことを深く考えるときにきています。

――そもそもどうして教育を研究しようと思われたのですか。兵庫県西宮市の生家は材木屋さんですね。

◆西宮市は文教都市として知られていますが、私が育ったのは臨海部のいわば下町地域です。5人兄妹の長男で、公立の小・中学校の出身です。そこで得た、かけがえのないいくつもの宝物、たくさんの友人や恩師との出会いが、教育社会学者としての私の原点、出発点となっています。

一家の大黒柱の祖父は、明治末年生まれで、終戦後、シベリア抑留から引き上げ、豪快な人でした。祖母は、宮崎県都城市の炭焼き小屋の娘で、小学校には4年までしか行かなかったそうです。戦後の混乱期には祖父の留守中、女手ひとつで守り、私の父を頭に4人の男の子を育て、ひたすらやさしい人でした

私の父は、家業に励み、学歴は中卒です。中学にもロクに通わなかったようですが、勉強することは好きで、いろんなことを独学で学んでいました。母は宮崎県の中学校を卒業後、我が家

海の恵み にがりを残した

はかた 伯方の塩®

※伯方の塩®は、自然の風と太陽熱で蒸発結晶させた
メキシコまたはオーストラリアの天日塩田塩を
日本の海水で溶かして原料とし、CO_2の排出を少なくしています。

伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL089-911-4140(代) FAX089-923-9671
ホームページ http://www.hakatanoshio.co.jp/

でお手伝いさんとして働き、大家族を抱えながら自営業を切り盛りする祖母を支えてきました。それでも母は、私や弟、妹が寝る前には、絵本や物語を読んで聞かせてくれました。

――いわゆる大家族という人間関係の中で長男として育ったのですか。

◆私の周りの大人たちは、決して「学」のあるタイプの人々ではありません。でも、それぞれが自分なりの「学び」を追求していました。そんな大人たちの姿を見て、育ったことが私の学力形成に大きな影響を与えたようです。

多様な人々と触れあって――

――私が毎日新聞記者になって最初に赴任したのが、阪神支局でした。1973年のことです。当時、西宮市役所では、同和行政の進め方をめぐって同和地区のたくさんの人々が市役所内に座り込んでいた光景を思い出します。いくつかの高校や中学校は校内暴力などで荒れていましたが、そのころは中学生だったのですね。

◆当時、私が通っていた公立中学校は、荒れた学校でした。校舎の窓ガラスが割られ、校内外でのケンカも日常茶飯事で、対教師暴力もありました。その「荒れ」の真ん中に、同和地区出身の子や、「在日」の子、そして商店街の子がいて、私はサッカー部に入り、毎日遅くまでボールを追いかける日々を過ごしました。ただ3年生の担任として熱血先生が転任してきて、クラスの何人かのゴンタ（「ワルガキ」）を手なずけ、まとまりのあるクラスができました。今でも、その先生を囲んだ集まりがあり、私が教育研究を志した原点もその3年3組にあります。

――高校進学はどうしたのですか。

◆そのころ、地元の公立高校はサッカー部が強く、サッカーをやり続けたかったのですが、全人教育をしている岐阜県の山奥にある全寮制高校（私立麗澤瑞浪高校）への進学も勧められました。サッカーをとるか、寮生活をとるか、迷ったあげく、親元を離れ、寮生活を送る道を選んだのです。

私が入ったのは「普通コース」。進学クラスに入ったら、部活動ができないと聞いていたからです。しかし、1年生の途中、英語科の30代半ばの女性の先生に「私といっしょに東大に行く気はないか？」といわれたのです。その高校の15年の歴史のなかで、卒業生が東大に入ったのは一人だけ。その先生の言葉に「チャレンジしてみよう」という気になり、先生との「二人三脚」が始まり、運よく現役合格を果たすことができました。

――いまの東大生には、中高一貫校出身の学生が多く、志水先生のような新入生は少なくなりました。

◆山奥で禁欲的な集団生活を送った高校時代の3年間は、海の底で暮らしていたようなものでしたから、東大でのカルチャーショックは大きかった。最初の1年間は都会的、知識人的な環境に適応するのに汲汲としていました。大学2年になり、教育社会学という学問に出会い、教育と選抜、学校文化、階層文化……など自分が歩んできた人生を「種明かし」をしてくれるような感じがしたのです。天からの啓示のようなものでした。一時、中学か高校の教師になりたいと思った時期もありましたが、結局、研究者への道を進みま

した。

――もともと「勉強好き」だったのですね。

◆私は、父母や祖父母から、一度たりとも「勉強しろ」と言われたことがありません。そのことは、ひそかな誇りです。「勉強しろ」と言われてやる気になる子どもはほとんどいません。逆に、親が真面目に学ぼうとしている姿から、子どもは多くのものを学ぶ。どう考えても、「子どもは親の背中を見て育つ」のです。

二極化が進む学力――

――子どもたちの全般的な学習意欲の低下、「学びからの逃走」といわれる現象が取りざたされています。学力低下や、学力の格差の拡大は、どうして起きているのでしょうか。

◆1989年と2002年に関西地区である調査を同じ学校、同じ問題で行いました。小学校5年生と中学校2年生の国語と算数・数学のテスト、そして生活アンケートです。そこで子どもたちの基礎学力の低下、子どもたちの家庭学習離れは明らかになりました。特に問題なのは「フタコブラクダ」と言われる学力の二極化、できる層とできない層の格差が広がっていることです。

――学力低下の実体は、大まかにいえば、できる子はできるのだけど、できない子の層が増え、その落ち込みが著しいことですね。

◆さらにいえば、学力と家庭環境の相関が非常に強まっています。低学力層のグループの家庭状況はとても複雑で、子どもたちの基本的な生活習慣が乱れていて、夜寝る時間が遅いとか、朝ご飯を食べてこないとかがあたりまえの状況でした。保護者の教師に対する不満とか不安感情が相対的に強く、こういった子どもたちは、学校生活を楽しめず、授業にも集中できないのです。重要なのは、学力の低下は親の学歴や文化階層の格差を伴って進行し、文化階層上位よりも下位の子どもの方が、より学力が低下していることです。

地域、学校の「つながり」格差――

――2007年から全国一斉の「学力テスト」が行われています。それによると、日本の地域間の学力格差が明らかになっています。

◆約40年前に行われた全国学力テストの結果と比較すると、興味深い事実がでてきます。1964年と2008年の都道府県別の結果では（＊注1）をみると、現在トップの秋田県は64年当時、最下位に近い。64年は東北が一番低くて、九州が次に低い。08年になると、簡単にいえば、日本の両端が上がって、逆に大阪が典型ですが、都市部が下がっています。

つまり64年の場合は、経済的、文化的な豊かさによる影響がみられます。東京や大阪などいろんなものを買い与えられる都市部の子どもたちのほうの学力が高く、一方の農村、漁村、山村などの地方が低い。昔の学力格差は、都会と田舎の違いで、都市化の進行と学力の高さはほぼイコールでした。

これに対して、08年のデータを分析すると、離婚率、持家率、不登校発生率の三つが学力との深い関連が見られます。まず、離婚すると家庭生活が不安定になりがちですし、秋田県は離婚率が一番低い。離婚率は、子どもたちを直接支えるべき家族関係の絆の厚さ、強さと関係しています。

次に持家率をみると、平均所得でいえば、大阪の方が秋田よりも高いが、持家率は秋田が高い。大阪ではマンション、借家に住む人が多い。持家率が高いということは、家があって、何世代か住んでいて、祖父母がいて、近隣とも顔見知りの関係があり、子どもたちも地域の祭りなどに参加しています。そのような地域の結びつきの強さを表しています。

不登校発生率では、秋田県は不登校の子どもは少なく、大阪は日本一の水準です。率の低い県では、みんな学校に行かなくてはならないという意識が強い。一方、不登校が多いのは都市圏で、行きたくなかったら行かなくてもいい、あるいは学校以外にも学ぶ場や機関などがあり、他の選択肢があるという場合、学校や教師、仲間との絆が

※注1　小6国語における都道府県別平均点の変化

〈1964年調査〉

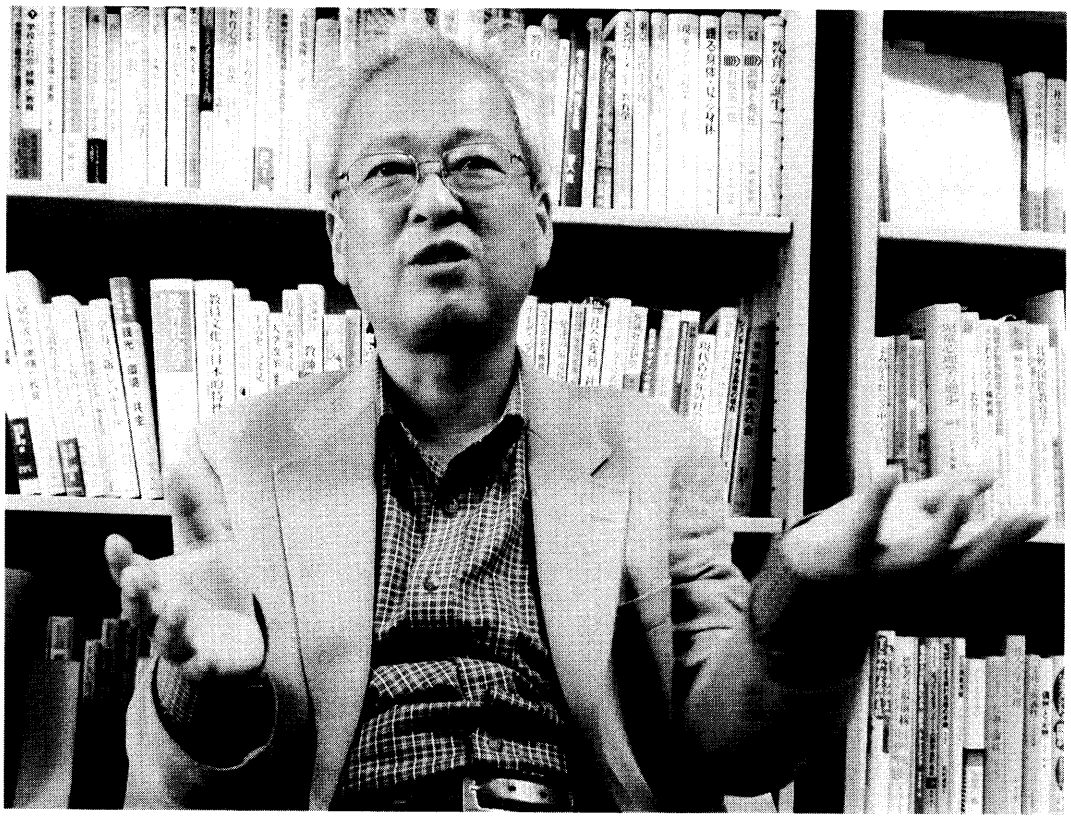
	県名	平均点
1	香川	67.3
2	愛媛	66.4
3	東京	64.9
4	福井	64.9
5	徳島	64.2
6	大阪	63.6
7	富山	63.3
8	兵庫	63.0
9	広島	62.8
10	京都	62.6
11～20位は省略		
21	滋賀	60.8
22	山口	60.4
23	石川	60.2
24	大分	60.2
25	茨城	60.0
26	埼玉	59.8
27	三重	59.3
28	山形	58.4
29	栃木	58.4
30	和歌山	58.0
31	高知	58.0
32	宮城	57.8
33	佐賀	57.8
34	熊本	57.8
35	新潟	57.6
36	山梨	57.5
37	福島	57.3
38	青森	57.1
39	群馬	56.4
40	長崎	56.4
41	鹿児島	56.4
42	宮崎	55.8
43	秋田	55.6
44	北海道	55.3
45	岩手	54.0

注　福岡県は調査を実施しなかった学校が多数にのぼったため、集計から除外している

〈2008年調査〉

	県名	平均点
1	秋田	137.3
2	福井	128.0
3	青森	125.8
4	富山	123.1
5	石川	122.8
6	東京	122.6
7	京都	122.1
8	岩手	121.1
9	広島	121.1
10	香川	121.0
11～20位は省略		
21	兵庫	116.9
22	福島	116.8
23	鹿児島	116.3
24	群馬	116.2
25	徳島	115.9
26	宮崎	115.8
27	神奈川	115.8
28	茨城	115.7
29	愛媛	115.0
30	愛知	114.3
31	栃木	113.8
32	山梨	113.6
33	宮城	113.4
34	佐賀	113.2
35	高知	112.7
36	岡山	112.4
37	島根	111.8
38	和歌山	111.7
39	福岡	111.3
40	山口	110.9
41	大分	110.5
42	滋賀	110.1
43	長崎	110.1
44	三重	110.0
45	大阪	109.7
46	北海道	106.9
47	沖縄	102.6

出典：志水宏吉『全国学力テスト―その功罪を問う』（岩波ブックレット、2009年）



相対的に弱まるのではないでしょうか。

この三つの要因は、地域、家庭、学校との結びつき、つながりの強さ、弱さを意味しています。すなわち、子どもたちの今の学力格差は、昔の「都鄙（とひ）格差」ではなく、「つながり」格差に由来しています。

――都市化が必ずしも学力向上にはつながってはいないということですね。

◆私たちが注意しなくてはいけないのは、文化的階層の上層で落ち着いた家庭の子、学力でいえば中以上の子だったら、地域や家庭のつながりが緊密でなくても、伸びることが多く、そのつながり格差の直撃を受けるのは下位層、ということです。言い換えると、しんどい子どもたちの学力は人間関係のつながりで支えるしかありません。経済的な要因はもちろん、文化的な要因もあります。教育を地域、家庭がどれくらい重視するか。全国上位の秋田では多くの子どもが当然のように宿題をこなしていますが、大阪では「別にやらんでもええわ」と考える子も結構います。その背景に、宿題なんかしなくても食べていける、もっと楽しいことに時間を使うべきだという考え方や価値観があることも否めません。

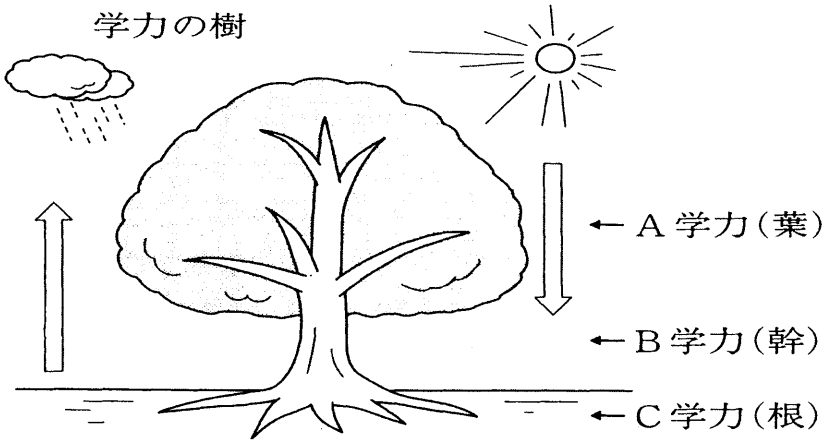
学力という「樹」

――その学力には、いわゆるテストで計れるのは「目に見える学力」と、氷山の水面下の部分のような「目に見えない学力」があるといわれます。

◆私はそれを「学力の樹」（＊注2）でとらえています。学力は、「葉っぱ」と「幹」と「根っこ」の三つに分けられます。葉っぱは、学校で勉強して、習得するひとつひとつの知識や技能。葉っぱで光合成して養分を生みだすように、子どもたちもいろんなことを学んで、生み出す。葉っぱは緑で目に飛び込んできますので、いわば見える部分、テストの点数で表れる部分です。

根っこは、地面にもぐっているので目に見えませんが、見える学力を支えています。学校の言葉でいうと、意欲、関心、態度です。教師としては、それを見極めるのが大事です。

その両方をつなぐ部分が幹、枝です。学校の言葉でいうと、思考力、判断力、表現力です。「葉」から「根」へ、あるいは「根」から「葉」へと、水分や栄養分が受け渡されていくなかで、徐々に幹や枝は太っていきます。これは、子どもたちが、学校で学ぶ具体的な知識・技能を、自らの生活や生き方との関連で使いこなしていく過程を通じて、しっかりとした思考力や判断力や表現力を育んでいくという事態と照応しています。「葉」と「幹」と「根」とが一体となって樹は育っていきます。そして、樹は一本で育つのではなく、林や森として集団で育っていくという面もあります。学力を育てるというのは、この三つの力をどのように育てていくかということだと思います。



※注2　学力の樹

家庭の役割

――学力も樹と同じように、周りの環境が成長に大きく関係しています。学力は学校の中だけで育つのではなく、家庭環境や地域のつながりによる影響も無視できません。まず学力の基礎としての家庭環境はどうしたらいいのでしょうか。

◆伝統芸能の世界をみれば、子どもが一流の人物になっていくのは、師匠である親が「やれ！　なれ！」と言う

からでは決してありません。家のなかの環境全体が彼や彼女を跡取りにしようという形になっており、そのなかで本人が時間をかけて必要な能力や意志を育んでいくからです。子どもは、親が「言ったように」ではなく、「したように」なっていくものです。子どもは、「勉強しなさい」と繰り返すだけではダメです。環境の中で自ずと学びとっていくような、親のはたらきかけが必要なのです。まずは、勉強できる環境をつくり、親が学んでいこうとしている態度を見せ、子どもといっしょに喜んだり楽しんだりしてほしい。

「力のある学校」とは――

――公立学校の課題といえば、どうでしょうか。

◆「学力保障」という言葉があります。保障といえば、安全保障、社会保障という言葉が思い浮かびますが、「とりで」や「防ぐ」という意味があります。学力保障も同じで、一人ひとりの子どもはしっかりとした学力をもって社会へ船出していく権利を有しています。しかし、いろんな環境のもとで、そうはなっていない子どもたちがいます。そんな子どもたちに力をつけてもらおう、その責任が社会にあるというのが学力保障の考え方です。

学校は無力ではありません。家庭環境に恵まれない子どもたちを支援できる場所があるとすれば、公立学校はその筆頭に位置します。そこで現実に、頑張っている教師もたくさんいます。そして、学力の底上げを成功させている学校の実態をみると、教師が一つのまとまりとなって取り組む姿勢が欠かせません。

――そのような「効果のあげている学校」をたくさん紹介されていますが、そこにはどんな特徴がありますか。

◆まず第1の特徴は、基礎学力保障のためのシステムを有しているということです。「本校の子どもたちにはここまで力をつけてほしい」と基準を設け、どの子にもその水準の力をつけさせることが基礎学力の保障です。

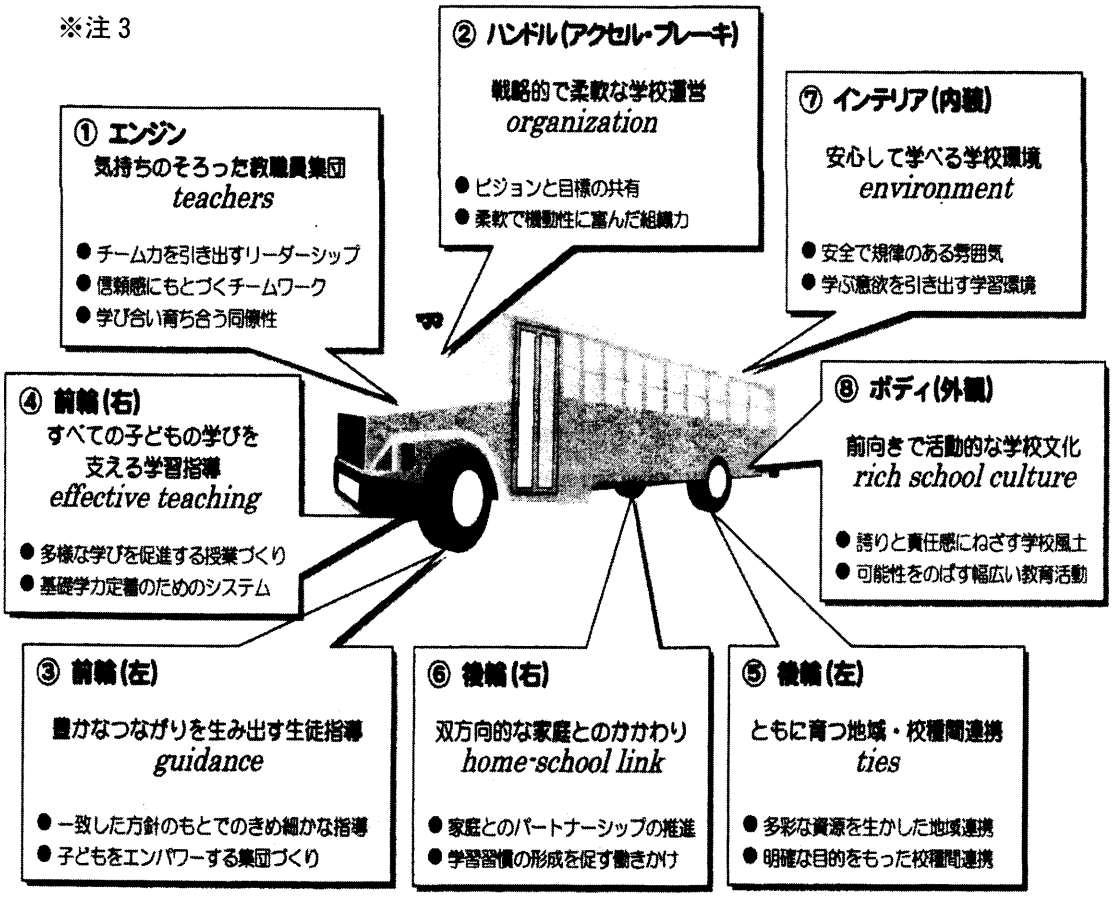
第2の特徴として、効果のある学校の土台には集団づくりがあるということです。効果のある学校の子どもたちは、人の話を本当によく聞きます。先生の話を聞く姿勢、子どもたち同士の意見を聞く姿勢というのが、ほぼ100%できています。

第3の特徴としては、そうしたことが成り立つ条件として、チームワークのある教師集団の存在です。教師のベクトルの向き（めざす方向）を合わせるということ、つまり、組織としての動きが徹底しているということです。「まずやってみよう」「失敗してもいいからチャレンジしてみよう」という意識を先生方がもっているかどうか、これが大切です。

――そのような実例をもとに、子どもたちを元気づける学校として打ち出されたのが「力のある学校」（empowering school）ですね。

◆学校現場ではよく、「力のある子ども」「力のある教師」という言葉が聞かれます。「力のある子ども」とは、総じて「いくつかの側面で高いポテンシャルを持っている子」のことを指しますが、「力のある教師」も同様で、「学習指導・生徒指導・部活指導などの諸領域で、総合力の高さを発揮する教師」がいるとき、もっぱらその言葉

※注３



が用いられます。そのような意味を込めた力のある学校の理想的な姿を私は、次のような「スクールバスモデル」（＊注３）として描いてみました。

・・・・・・・

スクールバスモデル

1、気持ちのそろった教職員集団―エンジン

2、戦略的で柔軟な学校運営―ハンドル・アクセル・ブレーキ

3、豊かなつながりを生みだす生徒指導―前輪（左）

4、すべての子どもの学びを支える学習指導―前輪（右）

5、ともに育つ地域・校種間連携―後輪（左）

6、双方向的な家庭とのかかわり―後輪（右）

7、安心して学べる学校環境―内装

8、前向きで活動的な学校文化―外装

・・・・・・・

このような八つの要素を念頭に入れた学校を通して、先生たちが子どもたちを学力保障という目的地につれていってほしいのです。

多様性のおもしろさ――

――都市ばかりではなく田舎も含めて、人間関係が希薄になっています。その中でどうやって地域の教育力を高めることができるのか。本の中で紹介されている「校区の実態を知ること、愛すること。それが公立学校の教師の使命やと思っています」というある校長先生の言葉が印象的に残っています。

◆公立学校のよさは、そこに「さまざまな人間が集う」ということの中にこそある。学校、とりわけ公立学校は、専門店としては成り立ちえず、地域密着型スーパーというか、「何でも屋」たらざるをえません。個別的・専門的な優秀性なのではなく、多面的な総合力です。そして、「力のある学校」とは、高い総合力を発揮している学校のことで、そこでは、子どもたちが元気に学校生活を送っているはずです。すべての子どもがエンパワーされる状態、すなわちレギュラーも控え選手もその存在意義を同等に認められ、全員一丸となって目標に邁進する姿を実現しているのが、私のいう「力のある学校」のイメージです。

――公立学校に勤務する教師たちのなかにも、自分の子どもを私立学校に通わせるケースも多いですね。「少しでもいい教育を選択したい」という本音と建前のギャップもあるようです。

◆そういう私も、三人の子どもたちは私立高校、あるいは私立中学に通いましたし、私はそれが子どもの選択だったということで納得しています。私自身が私立の全寮制学校の出身ですし、私立の存在や異議を否定するつもりは毛頭ありません。ただ、私の三人の子どもを見た場合、公立中学に行った子が私立中学に行った他の二人よりもたくましさを備えているように思えます。

――公立学校への逆風は、依然として続きそうですが。

◆公立学校のメリットは「地域性」「平等性」「多様性」ですが、その意義は決して失われるものではありません。地域に根差し、だれにでも平等に門戸が開かれています。最も大事にしたいのは「多様性」で、いろんな人がいるから公立学校はおもしろいと考えたいのです。さまざまなタイプの教師や仲間とかかわりながら、相互作用を引き起こし、新たなものを不断に生み出していく。それのダイナミズムは、私立学校ではあまりお目にかかれないものだと思えます。子どもは一人で育たないし、また一人では育てられません。みんなで育てるもの、と考えたときに、その中心にあるのが公立学校です。その意義とその役割は今後、ますます大きくなると思います。そのために今後、公立学校を支援していくための教育政策を考えていかなくてはなりません。

略歴

1959年9月兵庫県西宮市生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。東京大助教授を経て現在、大阪大学大学院教授。専攻は教育社会学、学校臨床学。

著書に「学校文化の比較社会学――日本とイギリスの中等教育」（東京大学出版会）、「学力を育てる」（岩波新書）、「公立学校の底力」（ちくま新書）、「『力のある学校』の探究」（大阪大学出版会）など。

NL

2010

7

CONTENTS

教育の広場

●公教育のよさを見つめ直そう
地域で共につくりあげる教育を　志水宏吉・大阪大学教授に聞く　4

NEWS ROTARY

●高齢者虐待防止と権利擁護
いつまでも自分らしく安心して暮らし続けるために　14
エネファームから始まる「パーソナル・エネルギー」の時代　22
健康な歯は美しい歯　26
磁気イオンを使った人と環境にやさしい理想の暮らし　30
特別展　龍馬伝　京都文化博物館　42
大阪市立自然史博物館便り　61

REGULARS

女性ホルモンの神秘と効用——21
医療事情のウラオモテ—臨床心臓病学教育研究会（ジェックス）の活動（2）——34
回虫博士の世界漫遊紀行—顔から皮膚から「ばっちいもの」健康学(6)——44
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？—ネコのひげ——46
なまずのひとりごと——地震と鯰（その二）——47
たかが　われらが日々？——ちがいがわかる人——50
あのときこんなこと——54
暮らしいきいき衣・食・住—足を痛めない靴選び——64
旅と宿—体験の宿—宿坊③——69
奈良歴史散歩—1300年の寧楽⑥—奈良「歴史街道」を歩こう①——73
LIBRARY——76
7月の運勢——79
編集後記——80

表紙写真　森村　進